

にちぎん

2021 NO.67

秋



インタビュー 扉を開く

白石康次郎 プロセラー

大海原の風を越えろ

地域の底力

島根県隠岐郡海士町

Iターン、Uターンの風に乗る先へと歩み続ける

島根県海士町の終わらない挑戦

エッセイ “おかね” を語る

YOU タレント「OKバブリー！」だったあの時代の事

私たちが高校を卒業する頃でしたか、いわゆるバブル期でした。仕事は山ほどあって、誰もが潤っていたような印象があります。私などはその頃モデルの仕事をしていました。そうです、こんなんでも、それができるほどに、たいていモデル（笑）の時期だったのです（企業が潤っていたから）。いや、もちろん素晴らしいモデルさんもいらっしやいましたよ！

私ごときでも、クラブに行くのにお財布を持っていったことは、なかったような気がします（笑）。お金って、そこらへんの誰かが払う、みたいな印象でした。

二〇代前半からバンドをやったりしてたのですが、レーベルにもお金があったので、みんなが海外レコーディングができて、レコードやCDもたくさん売れました。河口湖などのリゾート地で、シングル二曲録音するのに一週間以上滞在してゆっくりやりたりしていました。そんなに結果が出なくても、首を切られることもなく、音が熟成するまで育ててくれて、めいっばいのプロモーション期間がもらえました。なんとなく、一生こんな感じが続くのかしら、みたいに思っていましたから。

そんな風に二〇代前半を過ごしながら、バブル崩壊を経験することになります。そ



絵・江口修平

「OKバブリー！」だったあの時代の事

YOU

の光景は、まさに崩壊という言葉で言い表すより他ありませんでした。私たちはいきなり降ろされたシャッターの前でボー然とするしかありませんでした。頼りにしていた大人たちは、借金にのみ込まれ、存在すらわからない人もたくさんいました。売れないバンドはレーベルをなくし、バラバラになるしかありませんでした。当時、筋肉少女帯の大槻ケンヂ君と環七沿いのバーで、ボー然と会話していたのを覚えていますが、「僕たちが当たり前だと思っていた世界は、ただの飽和状態だったんだね」と。ギリギリ大人の手前で、ギリギリ生き残った私たちだったのです。それでもなお東京の土地価格の高騰などはとどまることも知らず、当時目黒区の端っこの野ざらしの駐車場が月額七万円だったのをまだ覚えています（笑）。

そんな時期を過ごしているの、なんでしよう、お金、怖いです（笑）。必要なので、大事にはしますが、たいていそれが原因で、人が変わったたり、もめたり、疎遠になったりするので。その辺で丸裸になることより、お金のことが全然苦手ですね（笑）。

結論、お金よ、君は癖が強いんじゃない！（千鳥のノブさんの言葉より、引用させていただきます）

YOU●東京都生まれ。1988年「FAIRCHILD」のボーカルとしてデビュー。バンド解散後TVバラエティーを中心に活動。2004年初の本格的映画出演作「誰も知らない」（是枝裕和監督）にて第78回キネマ旬報助演女優賞を受賞。その後は映画「THE 有頂天ホテル」（三谷幸喜監督）や、TVドラマ「ヒモメン」（テレビ朝日）などに出演。現在はバラエティー番組「セブンルール」（フジテレビ系）等に出演中のほか、本年11月スタートの連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」（NHK）にも出演が決定している。



2 エッセイ／“おかね”を語る
「OKバブリー！」だったあの時代の事 タレント YOU



4 インタビュー／扉を開く
白石康次郎 プロセラー
大海原の風を越えろ



10 地域の底力——島根県隠岐郡海士町
Iターン、Uターンの風に乗る
さらなる先へと歩み続ける島根県海士町の終わらない挑戦

18 FOCUS → BOJ ③7 日本銀行業務局 総務課国庫業務企画グループの仕事
国庫金のキャッシュレス納付をさらに普及させるために

日本銀行のレポートから

24 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2021年7月—

26 「地域経済報告」(さくらレポート) —2021年7月—



27 トピックス
新五百円貨の「打初め式」が開催されました ほか

31 AIR MAIL from Beijing
歴史と近未来が交錯する巨大都市

※取材は感染対策を徹底して実施しています。
本誌は9月1日(水)までの情報をもとに掲載しています。

表紙のことは

日本銀行仙台支店は、昭和十六年(一九四二)、日本銀行の一八番目の地方拠点として、伊達藩の時代から商業の要衝だった「芭蕉の辻」(現・青葉区一番町)にて開業しました。

表紙の初代営業所は、赤煉瓦造りに八角形の塔のある三階建ての建物でした。当時レストラン精養軒が借用していたこの建物を、所有する七十七銀行から買い受け、営業を開始しました。しかし、開業から四年後、太平洋戦争終戦直前の昭和二十年(一九四五)七月に、米軍の大空襲を受け、仙台支店は金庫と倉庫二棟を除いて全焼します。そのため、農林中央金庫仙台支所の一部を間借りして営業していましたが、昭和二十一年(一九四六)十一月に、営業所が再建されました。

昭和三十七年(一九六二)には、老朽化のため現在の店舗へ建て直し、仙台支店は本年十月で開業八〇周年を迎えます。仙台支店は、これからも地域の復興への歩みを見守っていきます。



表紙・画 北村公司

プロセーラー

白石康次郎

SHIRAIISHI Kojiro

たった一人でヨットに乗り、どこにも立ち寄らずに南半球を一周する——。本年二月、「最も過酷」とされるヨットレース「ヴァンデ・グロープ（注1）」で完走を果たした白石康次郎さん。アジアのセーラーで初の快挙だった。地球を相手に「生き死に」まで懸けて戦うレースの魅力はどこにあるか。ごく普通のサラリーマン家庭で育った少年時代や、世界一周の夢へ踏み出した修業時代の話とともに語っていただいた。





取材・文 小堂敏郎
写真 野瀬勝一

大海原の風を越えろ

世界一周しても、
僕は何も変わってない

——世界一過酷とされ、欧州

では非常に注目度の高いヨットレース「ヴァンデ・グローブ」で、アジア勢ただ一人の出場者として、初の完走という歴史的快挙を成し遂げられました。そんな白石さんは、どのような家庭で、どんな少年時代を過ごされたのでしょうか。

白石 僕はごく普通のサラリーマン家庭で育ちました。ヨット

とはまったく無縁でした。

どんな少年だったかという点、このままです（笑）。「ヴァンデ・グローブで完走してどう変わりましたか」ってよく聞かれますが、子どもの頃から今に至るまで本質的に何も変わっていません。小学生の頃は、「この指とまれ」と言っていて遊んだり、プラモデルをつくったりすることが大好きでした。戦艦大和

とや連合艦隊をつくり、完成したら、爆竹で爆破し、またつくる。今五四歳ですが、やっていることは小学生の頃と同じです。「この指とまれ」で、みんなが集まって、ヨットというでっかいプラモデルをつくって、世界一周し、また次のレースの挑戦に向けた準備をするのです。

——お母様を早くに亡くされ、お父様に厳しく育てられたと、ご著書に書いておられます。

白石 父は非常に厳しい人でしたが、あれしろこれしろと言

われたことはただの一度もありません。いつも言われていたのはただ一つ、「お前が決める。決めたらそれに責任を持って」と。

（注1）ヴァンデ・グローブ

単独でヨットに乗り、無寄港・無補給で南半球の四万キロメートル余りを一周する長距離外洋帆走レース。四年に一度、フランス西部の港町（ヴァンデ県レ・サール・ドロンヌ）をスタート／フィニッシュ地として開催される。レースにかかる所要期間は約三カ月。「世界一過酷なレース」と言われ、完走率は五〇〇程度。

そのおかげで僕は自分の人生を自分の責任において歩むことができた。そこは親父に感謝です。

僕は母親を小学校一年のときに交通事故で亡くしています。母親のありがたいみは体験できませんが、母がいないから自分のことを自分でやるすべからこそ、すべてを一人で決めてやりこなすという素地ができた。ヨットレースは、海の上で全てのことを自分でしなければなりません。それが自然とできました。どんな境遇も、生きる上で何一つ無駄にはならないですね。

—— 日本では、ヨットという競技自体が、欧州に比べ盛んではありません。

白石 フランスではヨットはいわば国技。世界最高峰の自転車レース「ツール・ド・フランス」、テニスの「全仏オープン」と並び注目を集めるのが「ヴァンデ・グロープ」です。ヨット乗りをセーラーと言いますが、

欧州でセーラーというと、日本の「サムライ」に近い意味合いを含む言葉です。

欧州の人からは「四方を海に囲まれているのに、なぜ日本はヨットの人気がないのか」とよく聞かれます。歴史的にみると、西洋諸国では中世時代に海上の覇権を争っていましたが、日本ではそのとき鎖国をしていました。そして、黒船が開国を迫った頃には、西洋ではもう帆船から蒸気船の時代へと移っていたんです。また立地面からみても、日本の沿岸は暗礁、岩礁が多いし、台風の通り道にもなっているなど、ヨットには不利な状況です。そうした歴史的・地理的な事情が重なって、日本ではヨットが盛んではない。石原裕次郎さんや加山雄三さんの映画のイメージが今も強いんじゃないですか。

—— 「ヨットはお金がかかる」というイメージも強いです。

白石 ヴァンデ・グロープに出るためにレース艇建設を含め総額で約二〇億円かかりまし



荒れる海の中で船を走らせる

(写真提供：DMG MORI SAILING TEAM)



しらいし・こうじろう ● 1967年東京都生まれ。神奈川県立三崎水産高等学校（現・神奈川県立海洋科学高等学校）専攻科（機関）卒業。86年多田雄幸氏に弟子入り。93年、当時26歳でヨットによる単独・無寄港・無補給世界一周の史上最年少記録を樹立。2006年10月単独世界一周ヨットレース「ファイブ・オーシャンズ クラスI」に日本人として初参戦し、07年5月に歴史的快挙となる2位でゴール。16年11月には「第8回ヴァンデ・グローブ」にアジア人として初出場（マストトラブルによりリタイア）。18年10月DMG森精機が立ち上げた日本初の外洋ヨットチーム「DMG MORI SAILING TEAM」のスキッパーに就任。20年11月「第9回ヴァンデ・グローブ」に再挑戦し、21年2月アジア勢として初の完走を果たした。記録は94日21時間32分56秒、33艇中16位に入った。プロセラーとしての活動以外にも、子どもたちと海や森で自然を学習する体験プログラムなどに携わる。主な著書に『七つの海を越えて』（文藝春秋）、『人生で大切なことは海の上で学んだ』（大和書房）、『精神筋力』（生産性出版）などがある。

た。僕がスポンサーを募り、お金を投資してもらったんです。——スポンサーは通常、選手の競技服や道具などに企業や商品名を入れることによる広告効果を期待し、お金を出します。ヨットの世界も同じでしょうか。

白石 通常、企業はモノを安く作り高く売ってもらうけます。これはビジネスです。でも僕は出してもらった二〇億円を二五億円にしてお返しするこ

とはできません。だって、ヨットで世界一周をして、優勝したとしても企業の商品は一つも売れませんからね。スポンサーに出す僕の企画書に、もうけ話は一切書いてないんですよ。じゃあ、僕は何を売っているのかというと、「物語」です。ヴァンデ・グローブという命懸けのレースに、人生を懸けてチャレンジする。そこに感動し、共感してもらえるかどうかです。

今回、工作機械メーカーがセーリングチームを立ち上げてくれましたが、ヨットをつくっている会社ではありません。チームにかけてくれた何億円というお金をマスコミの広告に費やせば、リスクなく大々的に自社のPRはできるでしょう。

失敗が頭をかすめたら、達成はできない

でもそこからは心揺さぶるような感動は生まれません。僕がやっていることは、スポンサー企業から見たら超ハイリスク・ノーリターン。でもそこにある物語にお金を投じ、感動を作り出すための資金的なサポートをしていただいているのです。

——県立三崎水産高校を卒業後、著名なセーラーの多田雄幸さん（注②）に弟子入りされました。

も「じゃあ今から来いよ」って。それで自宅に押しかけました。——水産高校と多田さんから、何を学ばれましたか。

白石 いつか世界一周したいと思いい、水産高校で船の機関士になる勉強をしていたとき、たまたま多田雄幸という人ーのちの僕の師匠ーの著書を読んだんです。個人タクシーのおじさんが、手作りのヨットで世界一周レースに出場しちゃう。しかも優勝。「俺も多田さんのようにヨットで世界一周したい」と、東京駅の公衆電話の電話帳で多田さんを探し出していきなり電話しました。多田さん

白石 水産高校ではエンジニアのトレーニングを徹底的に

（注②）多田雄幸

一九三〇年、新潟県長岡市生まれ。個人タクシーの運転手をしながら三八歳でヨットを始め、八二年第一回アラウンドアロウン（BOCチャレンジ）単独世界一周レースに唯一の日本人としてエントリーし、クラスII（五〇フィート艇）で優勝した。著書に、白石さんが感銘を受けた『オケラ五世優勝す』（文藝春秋）がある。九一年、六〇歳で逝去。

受けました。何か船に異常が発生したら、原因をひたすら追求です。ヨットセーラーは基本的にはエンジニアなのですが、その基本は水産高校で仕込まれました。

一方で、僕の師匠である多田雄幸の姿勢はその対極にありました。何もないキャンパスに絵が描ける人で、発想力、イメージする力がすごい。仲の良い和尚が貸してくれたお寺の敷地内で、手製で世界一周レース用のヨットをつくったんですよ。そのヨットの幅は四・二メートルと中途半端な長さでしたが、お寺の出口の幅でサイズを決めたそうです。そのヨットで世界一周レースに出て、優勝した。常識的には考えられないことです。多田さんは、アーティストであり、天才だった。

水産高校でエンジニアの基礎を、師匠の多田さんからは不可能を可能にするバイタリティーとイメージすることの大切さを学んだ。どちらもヨット

トレースでは必要不可欠な力。僕のヨット人生の宝です。

——ヨットレースの一番の魅力は何でしょうか。

白石 ヨットは、お金をかけていくから良い艇を作っても風が吹かなければまったく動きません。人間の知恵と科学技術を尽くしても、自然の恵みがないと役に立たない。ですがひとたび自然の恵みを受ければ、風より速く走ります。「アメリカズカップ」というマツチレースのヨットは風の三倍の速さで走る。風を追い越していくわけです。ヨットは人間の知恵と自然との調和でできているんですよ。だから、美しい。

ひとたびレースがスタートしたら、たった独りで、でっかい地球を相手にするわけです。人間の技術に頼ってばかりでも、自然に任せるだけでも駄目。地球を丸ごと相手にするスポーツとして、ヴァンデ・グローブは最高の舞台じゃないかと思っています。

——これまでにリタイアされ

たレースもありました。「失敗」について、どう捉えていますか。

白石 率直に今でも悔しいです。どのレースも、真剣に、全力でやった。誰にでも失敗はあるなどというそんな生半可な気持ちでやったら、ヨットでの無寄港・無補給の世界一周なんてとても達成できません。どの挑戦も同じだけ頑張ったけれど、結果は違いました。厳しい現実ですが、それが自然を相手にする競技の奥深さだと思います。

環境スポーツとしてのヨットに風が吹く

——十年以上前から居合の修行を続けているとお聞きしました。肉体の力は若い頃に比べ落ちてても、精神の鍛錬があったから過酷なレースを五〇代で完走できた、ということはありませんか。

白石 あります。今僕は少林寺二段、居合は五段。特に居合は二段以上になると、真剣で修行をするので、「生き死に」

二回続けてリタイアしたとき、サポートしてくれていた造船所の親方から「船のお尻を叩きながら走っているようだ」と言われて、それではいけないと、船によく話しかけるようになりました。そうした船への愛情とは別に、命を懸けたレースをしているせいか、僕は、船に神が宿っていると思っています。ヨットへの敬意とともに、そこに神を宿すことが大切だと僕は思っています。

の勉強になるんです。ヨットレース中、海の上では予想もつかないことが次々に襲ってきますし、精神力や一瞬の判断が試される。板子一枚下は死の世界ですよ。落水して命を落とす選手もいます。勝ち負けの前にも「生き死に」を懸けた戦いでもあるんです。

ヴァンデ・グローブの出港のとき、僕は袴姿で帯刀し、居合



フランスで行った居合トレーニング

(写真提供：DMG MORI SAILING TEAM)

の格好をして出たんです。みんな大喜びでした。これも僕のストーリーになるんです。他国のどんな選手でも、この僕のストーリーは真似できない。ヴァンデ・グローブで唯一の東洋人

であり、日本人である僕の振る舞いが注目される。フランス人にとっては、僕はファーストサムライですから。康次郎は何を考え、どんな行動を取るのか。そのストーリーに

欧州の人は注目し、応援してくれるんですよ。

僕自身、海外のレースに日本人として挑戦してきて感じるのは、日本は世界でも特異な存在だということです。日本にしかない文化や日本でしか使われない言語、そして円というお金。それで先進国なんです。新渡戸稲造が「世界に咲いた一輪の桜」と表現しました。すばらしい表現で、これぞ日本のストーリーじゃないですか。コロナ前には海外の観光客がたくさん来日していました。海外の人は、そのストーリーに価値を見いだしているのだと思います。

——日本においても、ヨットの存在感を高めたんですね。

白石 もっともつとヨットを広めたいという思いはありますね。今、風が吹き始めているなど感じているんです。世の中ではSDGsや脱炭素がキーワードになっていますよね。ヨットは、排気ガスを一切出さない究極の自然エネルギー

ギースポーツです。僕は今回のヴァンデ・グローブで、各地の海水をサンプリングしてきました。海洋環境において大きな問題になっているマイクロプラスチックを六個、サンプルとしてJAMSTEC（海洋研究開発機構）に提供したんです。世界一周レースで出会った数々の美しい海を、ずっとそのまま残したいですし、そのためにもヨットが環境にやさしいスポーツとして発展するとうれしい。

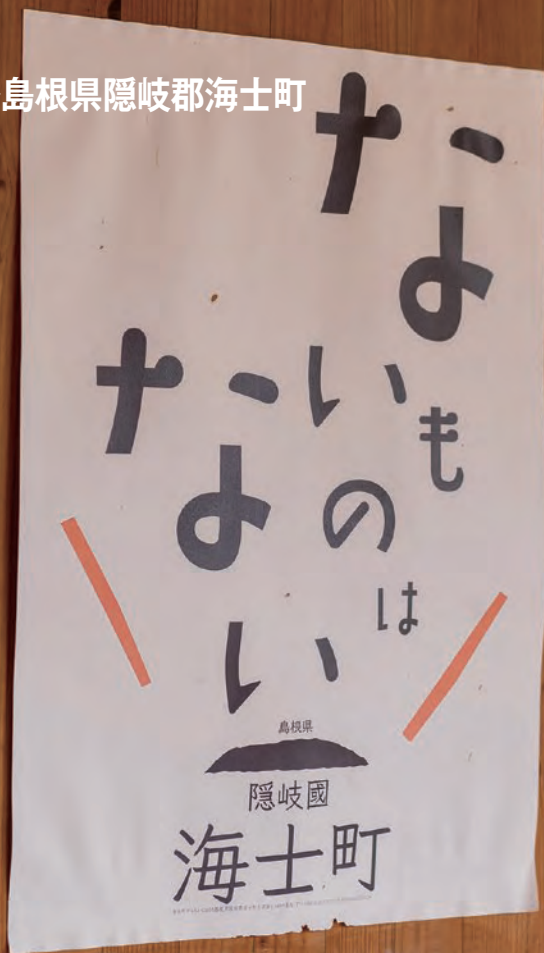
ヴァンデ・グローブをやっている最中、自分が何者であるか、今の自分でいいのか自分から問いました。「俺はこれでいい」と心から思えた。好きなこととことん追い続ける、僕みたいな大人がいてもいい。僕が師匠の多田さんに憧れたように、僕の後には続く人がきつと出てくるでしょう。それを僕は楽しみにしています。

——本日は、貴重なお話、ありがとうございました。

（聞き手／情報サービス局長 渡邊昌二）

地域の底力

島根県隠岐郡海士町



Iターン、Uターンの風に乗り さらなる先へと歩み続ける 島根県海士町あまちようの終わらない挑戦

島根県の沖合、隠岐諸島の海士町は、
既成概念にとらわれない改革を重ね、
地域振興の先駆けとして
注目を浴びてきた。
人々の熱い思いは今もなお変わらず、
あらたなチャレンジが
重ねられている。



取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

上／第187回国会の所信表明演説で引用され、話題になった海士町のキャッチコピー「ないものはない」。下／海士町は隠岐諸島で最も米作りが盛んなところ。2016年に島外向けに開発したブランド米「海士の本気」で、さらなる前進を図る。



海士町のある中ノ島ほか隠岐諸島の3島と、鳥取県の境港または島根県の七類港を約2時間～2時間半で結ぶフェリー「しらしま」。海士町を訪れる際には、同ルートを約1時間で走る高速船も利用できる。



町の厳しい財政状況を共有し、行政と住民の心はひとつに

島根半島の沖合約六〇キロメートルに位置する島根県隠岐諸島は、大小一八〇以上の島々からなる。その一つ、中ノ島全体を町

域とするのが、人口約二二〇〇〇人の隠岐郡海士町だ。

自然の恵みが豊かで、漁業はもちろん、名水百選にも選ばれた豊富な湧き水が田畑を潤



後鳥羽院を祀る「隠岐神社」(上)は、崩御から700年目にあたる1939年に創建。周辺には「海士町後鳥羽院資料館」(下)や行在所跡などがあり、散策を楽しめる。後鳥羽院の配流から800年目となる2021年は、さまざまな遷幸イベントが予定されている。

す農業が盛んな海士町では、縄文土器が出土するほど古くから人の暮らしが営まれてきた。歴史の舞台としては、聖武天皇がこの島を遠流の地と定めて以降、後鳥羽上皇をはじめ、殿上人を受け入れてきたことでも知られる。

「海士町のある中ノ島は奈良時代から、海産物を朝廷に献上してきました。身分の高い方たちが遠流されるのは、一説には島が、安全で食に恵まれていることから選ばれたのではないかとわれています」と話すのは、二〇一八年から町長を務める大江和彦氏だ。

この海士町が「地方創生のトツプランナー」と言われるほど注目を浴びるようになったのは今から

約二〇年前、大江氏が町役場の職員だった二〇〇二年、民間企業出身の山内道雄氏の町長就任が転機になった。最盛期には約七〇〇〇人だった人口は、その頃半分以下にまで減少し、町の借金は約一〇〇億円まで膨れ上がるなど、ほかの地方以上に危機的状況にあった、と大江氏は振り返る。

「山内町長がまず打ち出したのは、自身を含む現場職員の大幅な給与削減でした。財政が厳しい危機的状況を住民に理解

してもらい、一体となって取り組むためです。我々の身を削る行動が伝わったのでしょう。暮らしに関わる助成金を自ら返納する動きが住民から出るなど、変化が見られるようになりました」

山内氏の陣頭指揮のもと産業振興に携わっていた大江氏は、澄んだ海域で採れる養殖岩ガキの「いわがき春香」やミネラルが豊富な牧草で育つ隠岐牛のブランド化、冷凍・解凍を経ても水産物の鮮度やおいしさが損なわれないCAS(注1)と呼ばれる凍結技術の導

「海士町が改革を進められたのは、行政と住民がともに地域の危機感を共有できたからこそ。危機感が共有されたことで、途中で議論が頓挫しそうになっても戻るべき原点ができました。多くの人が『変わらないと生き残れない』と本気で思っている町です」と話す町長の大江和彦氏。



(注1) CAS (Cells Alive System)：磁場エネルギーで細胞を振動させることで、細胞組織を壊すことなく凍結させることができるシステム。長期間にわたり鮮度や食感などをそのまま封じ込め、解凍後も取れたての旬の味を食べることができる。

玄関口・菱浦港に立つ「キンニヤモニヤセンター」には、「自立・挑戦・交流 × 継承・団結」、「みんなでしゃばる」という町の方針が掲げられている。



「キンニヤモニヤ」は町に伝わる民謡。毎年8月に開催される「キンニヤモニヤ祭り」は、島外から訪れた人を含めた1000人規模のパレードが行われる。(写真提供: キンニヤモニヤ祭り実行委員会)

入により特産品の価値向上を図った。こうした取り組みを通じて町に雇用の方が生まれていったほか、生徒数の減少で廃校寸前だった地元の隠岐島前高校は、広く全国から生徒を招き入れる「島島留学」を実施したことで息を吹き返す。

斬新な改革の数々は世間の耳目を集め、その精力的な動きと島の人々の情熱に魅せられて移住した人たちもまた、自由な発想と挑戦ができる環境を与えられ、やがて次の改革の原動力になっていく。

「ないものはない」。生きるために必要なものはすべてここにあり、ないからこそ良い、という意味を込めた、二〇一一年の宣言もまた多くの人々の心に響いた。

果たして、二〇〇四年〜二〇二〇年のイターナー者数累計は約七五〇人。そのうち三六〇人以上が、現在（本年六月時点）も島で暮らす。イターナーは約二〇〇名を数え、コロナ禍においてもその流れは途絶えていない。

大江氏が町長を務める現在も、改革は受け継がれ、山内氏が掲げた方針である「自立・挑戦・交流」に「継承・団結」を加え、さらには「みんなでしゃばる島づくり」を町の指針に掲げた。「しゃばる」とは方言で、強く引っ張るという意味だ。



環境省による名水百選にも選ばれた天川の水（上）。その水が流れ出る保々見湾の海水からつくる「海士乃塩」（下）は、海士町の特産品の一つ。

「みんなでしゃばる」動きが島内の各所で見られる中、物見遊山型の従来の旅行スタイルではなく、インバウンド旅行者から町民

島に信頼を置きながら 地域を牽引する移住者

「みんなでしゃばる」動きが島内の各所で見られる中、物見遊山型の従来の旅行スタイルではなく、インバウンド旅行者から町民

まであらゆる多様な人の交流の拠点として期待がかけられているのが、二〇二二年七月にオープンしたばかりのホテル「Ento」^{エントウ}。老朽化した島内唯一のホテルをリノベーションし、別館を改築しての再スタートをきった。客室からは、二〇一五年に認定された「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」(注2)の穏やかで美しい景色が臨める。

Entoを運営する株式会社「海士」の代表取締役の青山敦士氏は、も

右/島で生まれ育つ隠岐牛は、そのおいしさと希少性が相まって、首都圏をはじめ島外で高い評価を得ている。下/「島じゃ常識 さざえカレー」は、2000年の発売時に脚光を浴びて以来、息の長いヒット商品。



(注2) 前身の「世界ジオパーク」には2013年に認定されている。



Entô 内の様子。地球 46 億年の歴史を感じる化石の展示や、展示フロアや客室の目の前に広がるジオパークの景色から、隠岐の自然の神秘を体感できる。



「海士」代表取締役の青山敦士氏は、学生時代には途上国を支援する仕事に就くことを思い描いていたが、「先進国と途上国」と「都市と地方」の関係性は似ているので、まずは地方でチャレンジしてみてもいいのでは」との周囲のアドバイスを受けたこともあり、海士町へと人生の舵を切った。

ともと北海道札幌市出身。大学生だった二〇〇五年に先輩に連れられ、初めて海士町を訪れた際、町をどうしていくか真剣に議論する島の人々の熱気に魅せられ卒業後に移住。海士町観光協会の社員として、町の活性化に携わってきた



経験をもとに、Entôへの思いをこう語る。

「海士町は単なる観光目的ではなく、学びや人との交流を求めて来られる方が多い。ですから、Entôは、来島者と島の人の出会いをいかにデザインできるかを考慮し、人のつながりや情報を提供する拠点でありたいというのが一番の目標です。今後は島の入り口となっている港でのチェックインや、その対応に地元の高校生にも参加してもらい、かつ彼らに島内の案内をしてもらおう、といったことも考えています」

移住から約一五年。自身を含めた人々の取り組みには、成功だけではなく失敗も数多くあったが、

成否にかかわらず挑戦を受け入れ、応援するのがこの島の魅力だとも。

「東京の進む方向に、地方が必死に追い付こうとする流れがあります。が、われわれが進むべきはその方向ではないと思っています。離島の海士町は、少子高齢化や財政難という日本の課題が凝縮された地域ですが、そういう地域だからこそ、東京とは違う進路を本気で進む、いわばタグボート（狭い航路で大型船を先導する船）になろうと、僕たちはさまざまなことに挑んできました。成功も失敗もすべて、これからの社会に何かしらのヒントになるはずだから挑戦を続ける。そんな意識がここには根付いています。この島の移住者にはスローライフや田舎暮らしへの憧れを持った人もいますが、一生懸命働きたい、何かに貢献したいという思いを持っている方が多いですし、その願いに応える島だと思います」



菱浦港からすぐの場所に位置し、港に入る前に来島者の目に飛び込む「Entô」は、全室オーシャンフロント。改築された別館の客室にはあえてテレビを置かず、ひとときをゆっくり過ごせる配慮がなされている。

地域振興の雄として今、海士町が示すべきこと

海士町の地域づくりや企業研修、地域コーディネーターの研修といった人材育成を手掛け、地元との振興にも深く携わってきた「風と土と」代表取締役の阿部裕志氏もまた、大手自動車メーカーを退職して二〇〇八年に移住した。移住者や多様な交流から見いだされる新しい「風」、町の人はその風



「小さな島だから、いる人でやるしかない。人は取り替えがきくものではない。『ないものはない』の最たるものは、人だと思います」と言うのは、「風と土と」代表取締役の阿部裕志氏。阿部氏は移住後の2008年に、「巡りの環」を創業。海士町だけではなく、都市や他の地域へも活動を広げることを目的として、2018年に社名を変更。（口ゴ写真提供：株式会社風と土と）

を感じ、その中からあらたな現実としての「土」をつくる。その思いが、社名に込められている。「大学でロケットの素材開発の研究をする一方、アウトドアや旅をする中で人の温かみに触れ、自然の美しさと厳しさを知りました。卒業後、大手企業に勤めましたが、グローバル競争で勝つために、周りの人を蹴落としてでも強くなる。その先に誰が幸せになるんだろう？」と疑問を持つようになり、そんなことを考えていた矢先、縁あって海士町に出会ったんです。この地で暮らす人々たちを見ながら、人と人が支え合い、自然の中で生きていく次の社会モデルを、ここから提案し、発信できるのではないかと考え移住しました。この島では、さまざま

まな人が未来の当事者としてこれからの社会モデルを作ろうとしているのが特徴です。私はそんな島に学びの場をつくることで、ほかの地域や組織に資する人を輩出したいという思いを抱き、そのための取り組みを進めてきました。そういう人材を求める企業が大手にも広がり、僕らの活動に共感し始めているのを実感しています」

実際、「風と土と」は大手企業から社員の出向を受け入れ、十社以上が研修に参加しており、その関心の高さがうかがえる。多くの企業が地方に目を向けつつある今、文化、価値観の違いを理解し、橋渡しができる人材の育成が必要だとも阿部氏は語る。

加えて阿部氏は、海士町が他地域より先を行くモデルとして挑戦し続けるため、これまでの実績を整理、分析し、そこに基づく仕組み作りを町と連携して進めている。

「これまで海士町では、特定の人を中心にあらたな挑戦が続けてきました。しかし、今後のことを思えば突出したリーダーに頼らなくとも、あらたな挑戦が生まれ続ける仕組みを考えていかなければなら



りません。地方のタグボートとして先を行くため、さらには大江町長が言う『みんなでしゃばる』ためにも、その道筋を示していきたくて考えています」

さらには、時代をつくる新しい知恵をこの島から生み出していきたいとの思いから、二〇一九年には出版社「海士の風」を設立。一冊目となる『進化思考』は発売後一週間で三万部を突破した。

「挑戦と交流を続けてきた島に出版社をつくることで、時代の先をつくる人や知恵がさらに集まりやすくなる。それが島の知を高め、海士という地のブランドの確立に資すると思っています」

新しい風が島に吹く マルチワーカーの 取り組み

青山氏や阿部氏ら、しゃばる人たちの発案により二〇二〇年一月に設立された海士町複業協同組合もまた、注目すべき存在だ。二〇二〇年に国の制度として発足した特定地域づくり事業協同組合制度のもと、日本初のマルチワーカーのための組織として誕生し、現在は男女計六名が所属。勤務先となる事業所には、青山氏の「海士」、阿部氏の「風と土と」も名



上／阿部氏によれば、対話を重ね、お互いの理解を深めながらものごとを進めるのが海士町のスタイルとのこと。課題も解決策も現場にあると、話し合いの場は写真のように屋外でなされることも少なくない。左／2021年4月、阿部氏が代表を務める出版社「海士の風」が世に送り出した最初の本、太刀川英輔氏の『進化思考 生き残るコンセプトをつくる「変異と適応」』。



雪野氏が働く漁船での作業は、少しの気の緩みが命取りになりかねない危険が伴うため、互いの協力が肝心となる。

(写真提供：海士町複業協同組合)



CAS冷凍で出荷される「いわがき春香」は、クリーミーなうまさとすがすがしい後味に魅せられる。

を連ねる。

組合の職員は、自らキャリアアップを立て、自ら働く場(事業所)を選択する。一年目は一カ所あたり三カ月、最低三カ所の事業所で勤める、島を知るインプットの時期。二年目は、二カ所程度の事業所で働き、三年目はそれまでの経験を踏まえつつ、徐々にアウトプットに重点を置いた働き方をする、非常にユニークな仕組みだ。

その第一号職員が、医療診断技術を専門とする工学博士の雪野瞭治氏。戦略デザインコンサルティングの会社勤務を経て二〇二〇年末に移住した雪野氏が最初に働いたのは、なんと漁業の現場だった。

島内で最も好きな場所だという、隠岐神社を背にした海士町複業協同組合職員の雪野瞭治氏。「この町は、生きる上で何を大事にしなければならぬかが分かっている、それを本当に大事にします」



たのは、なんと漁業の現場だった。そうだ。

「後から聞いたところ、漁業という命と隣り合わせの危険な職場に素人が入って大丈夫かと、当初受け入れ先は消極的だったそうです。ただ、お荷物な存在だったかというところがなかった。例えば、職人気質の漁師世界で素人にゼロから教える機会は離島ではほとんどありません。人に教えることで中堅の漁師さんたちにとって身につくものがあつたと聞きました。また海から見る朝焼けの景色や新鮮な魚介類を前に僕が感動している、漁師さんたちは、自分たちの職場や仕事への誇りも改め

て思い出したと言われました。そのほか、例えば藻が網につくと魚の収穫が落ちるのですが、理系の僕が、対応策を提案するなど、技術的にアドバイスできることもありました。大変喜ばれ、自分の知識が役立つたのはうれしかったですね」

今では女性が初めて定置網漁に携わるようになるなど、雪野氏の活動は大きな影響を及ぼしているという。

雪野氏はその後、水産物の加工現場を経て、現在は水産加工物の通信販売のサポートをはじめ複数の業務をこなしている、と話す。

「同じ島の中でも複数の仕事に



雪野氏がサポートする、「ふるさと海士CAS事業部」のeコマース。(写真提供：離島通販 島風生活。)

携わることで、ものを見る視座が広がります。またそれぞれの現場の思いや課題を当事者として経験できる。同じ水産加工をするにも、漁業者、加工、販売、マーケティングそれぞれを経験することで、いずれは各工程の橋渡しの役割が担えるかもしれません。いろいろな挑戦をするこの島では、いつも、どこかで誰かが課題を前に悩んでいます。とにかく人が必要とされ、感謝される。その小さな営みの連続です。しかも離島ですので、自分が携わったことがどこに影響しているのか、実感



海士の本気米生産組合の組合長波多剛氏は島内で唯一の米専業農家だけに、地元のみでの流通だけでは将来的に厳しいと実感しているという。今後、米とCAS冷凍の水産物のセット販売も検討中。

農家の未来のために 進められた 米のブランド化

あらたな挑戦は、伝統産業でも

できる。奇抜にも思えるようなアイデアにも真剣に耳を傾け、実践に移してもらえ。毎日が面白すぎて、体がもうひとつあればいいのに、と思いますね」

定置網につく藻の軽減や、深海での食材や酒の熟成など、島での経験から生まれた雪野氏のアイデアは尽きない。話を聞きながら、青山氏や阿部氏が島で暮らし始め、挑戦を重ねながら覚えた胸の高鳴りを、次の世代の雪野氏も実感しているように感じ、地域振興の雄、海士町の力を見た思いがした。

見られる。その一つが、七軒の農家が共同で取り組み、二〇一六年に発売された米「海士の本気」だ。背景には農家の高齢化、離農、後継者不足が続き、海士町の美しい田んぼの景色が消滅するかもしれないという危機感があったと話すのは、海士の本気米生産組合組合長の波多剛氏だ。

「海士町は昔から稲作が盛んでしたが、島内で消費して終わるのが当たり前でしたから、そのままでは農家の所得は上がりません。この島の大事な宝である米作りを若い世代に引き継ぐには、島外に販売を広げていく必要がある。僕を含めた立ち上げのメンバーは、未来に向けた海士町の米作りの土台をつくりた

島の北部、のどかな田園の中に建つ宇受賀命神社は、平安時代の「延喜式神名帳」に名が記されたほど歴史が古い。



いとという気持ちから、ブランド化にチャレンジしました」

土づくりには隠岐牛の堆肥や岩ガキの殻を使用することで、島内でものが循環するようにした。減農薬で育てた米はミネラル分が豊富になり、もちもちの食感も生まれたという。

販売開始から五年が過ぎた現在、高値にもかかわらず連携した東京の大手百貨店では上々の手応えがあり、通信販売やふるさと納税の返礼品、島外への贈答品や土産物としても人気が高い。リピーターが増えているのは、そのうまさの評価された証しだろう。

今回の滞在で実感したのは、島でふつうに食べられている米が実においしいということだった。やわらかなうまみと軽快な後味は、忘れがたい記憶を残したが、「海士の本気」はその特徴を際立たせた感じがある。

「この島では、自分が栽培した野菜や米を振る舞うのが日常。自分で食べきれない分は、よそに分けるのが当たり前なんです」という波多氏の話には、自然の恵みに育まれた島に住む人々の豊かな心が垣間見えた。この島の風土、そしてその風土が育んだ人々の心のあ



島内を巡れば、気持ちの良い海の景色と同様に緑が広がる水田の美しさも記憶に刻まれる。



地域とのコミュニケーションを深めながら島で働く「大人の島留学」は、広く全国から若者たちが集まり、この中から、海士町移住を考える人も生まれているという。(写真提供：海士町)



2021年には、Entôや「風と土と」も関わる「オープンアイランド」の取り組みがスタート。農業体験や高校生とともに歩く「山菜ハント」ほか多彩なアクティビティを体験しながら、島を訪れた人がより多くの住民と交流できるイベントとなっている。(写真提供：海士町観光協会)

若い世代が島に集まる今、次なるフェーズが始まる

りようは、遠流された殿上人から現在の移住者まで、「よそ者」を受け入れてきた懐の深さにも関わっているのかもしれない。

世間に先駆けたタグボートのアイデアや活動は、ほかにも島内のあちらこちらで生まれ実践されていると、町長の大江氏は語る。その一つが、学生や若手の社会人を対象にした中长期移住制度「大人の島留学」。インターン生として働く若者たちが島にあらたな風を



海水浴場やキャンプ場も設けられ、女神がお産をしたという神話が伝えられる明屋海岸。

吹き込んでいっているという。また、今後も起こるであろうさまざまな島での挑戦に対し、一億円を超えるふるさと納税の一部を運用する一般社団法人海士町未来投資委員会が設立されるなど、資金面の援助体制も整備され、期待が寄せられている。そのほかにも、大江氏が

進める、役場の職員が地域振興につながる現場に積極的に携わる働き方改革「半官半X」がある。いわば、行政版のマルチワーカーで、他地域にはない取り組みとして注目される。

さらには、島留学を実施してきた島前高校の卒業生たちが、進学や就職でいったん島を出た後に戻ってくる還流が生じていると大江氏は顔をほころばせた。

「大人の島留学のインターン生や隠岐島前高校の卒業生の還流による若い世代が、今、あらたな挑戦を始めているのがうれしいですね。これまで移住者を受け入れ、成果を出してきた結果、住民はあらたに人が入ることで町が元気になることを認識し、移住者の存在は特別なことではなくなっていると思います」

多くの移住者をひきつけ、地域の生きる道を本気で考え、模索する海士町。この町では、あらたな風を吹き込む移住者、そして豊かな土としての島民が、島の未来やそれに向けた取り組みを真剣に議論し、失敗を恐れず挑戦し、その挑戦を応援しながら、未来へのバ

トンを確実につないでいる。そんな島内では、すれ違ふ子どもたちすべてが挨拶をしてくれたのも印象的だった。現代社会で失われつつある温もりが、海士町では当たり前前に生きている。これまでにまかれた種はこの先、どのようにならぬのか。前進し続けるであろうタグボートがこれから先どこに行くのか。海士町から目が離せそうにない。



町の玄関口である写真の菱浦港をはじめ、島内のそこかしこに、豊かな自然が彩るのどかな景色が広がる。

国庫金のキャッシュレス納付を さらに普及させるために

日本銀行の重要な業務のひとつに、国のお金（以下、国庫金）の受入れと支払いがあります。国庫金と聞くと難しく思われるかもしれませんが、その多くを占めるのは税金の納付や年金の受け取り、つまりは、国民一人ひとりの暮らしと密接に関わるお金です。それらの支払いが円滑かつ効率的に行われるよう企画立案を担うのが、業務局総務課国庫業務企画グループです。さまざまな取り組みが進められる中でも、現在大きく力を注いでいるのは、国民の皆さまが納付する国庫金（税金や年金保険料など）のキャッシュレス化をこれまで以上に推進することです。今回は、キャッシュレス納付の普及のための最近の取り組みをご紹介します。

国民の日々の暮らしとつながる 国庫業務企画グループの仕事

日本銀行の重要な業務のひとつに、「政府の銀行」としての役割があります。具体的には、税金や年金といった、個人や企業と国との間で生じる国庫金のやり取りに携わる仕事です。二〇二〇年度における国から個人や企業への支払いは三億九〇〇〇万件／一九〇兆円、個人や企業からの受入れは一億六〇〇〇万件／二三〇兆円（日銀推計）

と、実に膨大な件数・金額を扱っています。その支払いが滞りなく行われるように、制度の企画立案を担うのが業務局総務課の国庫業務企画グループです。グループ長以下約四〇名の職員が業務に携わっています。このグループを統括する担当参事役の山崎真人さんは、グループの役割や置かれた現状についてこう話します。

「世の中が目まぐるしく変わる中で、国庫金の支払いを、安全、確実かつ効率的に行っていくための仕組みについて、関係者と連

携しながら考えるのが私たちの仕事です。

先人たちは社会のデジタル化の進展を見据え、これまで制度やシステム基盤を地道に築いてきました。こうした取り組みが実を結び、国から国民の皆さまへの国庫金の支払いは、口座振込に代表されるように、ほぼキャッシュレスとなりました。国が国民の皆さまから受け入れる国庫金についても、キャッシュレスでの納付手段が既に整備されています。しかしながら、その認知度はまだ低く、キャッシュレス納付の割合は、緩やかな上昇傾向にあります。ようやく五割を超えたところであり、まだまだ道半ばと言わざるを得ません。ただ、昨年から続く新型コロナウイルス感染症の影響により、非対面・ペーパーレスに対する社会的要請が強まっていることもあり、状況が大きく変わりつつあります。政府においても、行政サービスのデジタル化の取り組みを一段と加速しており、日本銀行として

も、こうした世の中の変化をしっかりと受け止め、国庫金のキャッシュレス納付がさらに普及していくよう、関係者の取り組みをサポートしていきたいと思っています」

現在、国庫業務企画グループが中心となり、全国に三二店舗ある日本銀行支店のネットワークをフルに活用しながら、多方面への取り組みが進められています。

納付者自身のコストも大きく削減する国庫金納付のキャッシュレス化

国庫金納付のキャッシュレス化といっても、実際に、どの部分のキャッシュレス化が立ち遅れているのでしょうか。

国庫金の納付方法は、金融機関の窓口やコンビニで納付書を使って行う「現金納付」と、口座振替やクレジットカード納付、スマートフォンやパソコン、ATMから行う「Pay-easy」による納付といった「キャッシュレス納付」の二つに大別されます。国庫業務企画グループ長で企画役の西澤裕之さんは、日本銀行で力を注ぐキャッシュレス化の意義についてこう話します。

「私たちとしては、金融機関窓口での現金納付をキャッシュレス化していくことが大事だと考えています。金融機関窓口での現金納付は、とりわけ社会的なコストが大きい状況です。個人や企業の納付者には、書類への記入、金融機関までの移動や窓口

での待ち時間が生じています。また、金融機関では書類の仕分けや郵送作業に加え、書面事務を処理するためのシステム投資が、国・地方公共団体では受入処理や受入情報のデータ化といった作業がそれぞれ必要になっています」

全国銀行協会による試算では、税金(国または地方公共団体に税金や社会保険料などとして納付されるお金)全体で見ると、納付者には年間二〇〇億円以上、金融機関には年間約六二二億円のコストが発生しているとのこと。また、納付書などの書類に使われる紙のコストも含めると、金融機関の窓口納付にかかるコストは膨大なものになります。

「国庫金の現金納付の九割を国税、国民年金保険料、交通反則金が占めています。とりわけ金融機関の窓口利用が多いのは国税で、その約八割が企業からの納付です。現金納付がまだまだ主流となっている国税納付のキャッシュレス化に向け、最適な情報発信の在り方をしっかりと見極めて、さまざまな取り組みを重ねているところです」

銀行の窓口の利用が当たり前という根強い意識

国税当局では、キャッシュレス納付に関してさまざまな手段を整備しています。なかでも「Pay-easy」による納付に関してはすべての税目に対応し、スマートフォンやパ

ソコン、ATMからでも納付できます。にもかかわらず、国税では金融機関窓口での現金納付がなかなか減らない背景について、同グループ企画役の金井由佳さんはこう説明します。

「多くの企業が現金納付を続けている背景を、関係者の方々との意見交換やデータの分析を重ねて調べてみると、次の二つのことが分かりました。

一つは、国税では申告と納付という一連の手続きにおいて、申告は税理士、納付は



大量の国庫金の納付書。「現金納付」に伴う社会的コストは大きい

企業と分かれている場合が多く、キャッシュレス納付に必要な情報の連携が両者の間で必ずしも十分にできていないことが多いということです。申告については約七割が電子化されていますが、納付については約三割しか電子化されていません。キャッシュレス納付を普及させるためには、手続きの川上にあたる申告を担う税理士の皆さまの協力が不可欠だと気付かされました。

もう一つは、納付手続きを担う企業側の経理担当者は、国税の納付のほかにも、さまざまな支払い手続きで金融機関を訪れる機会が多く、窓口での現金納付が当たり前になっているということです。例えば、地方税を窓口で現金納付している企業であれば、地方税の納付のために金融機関に赴いているので、国税と一緒に金融機関の窓口において現金で納付してしまえばよい、と考えてしまうケースは少なくありません。国税と地方税を一体としてキャッシュレス化していくことが重要であると分かりました。

企業の国税納付に関わる人々は、官庁から金融機関、税理士、企業の経営者や経理担当者まで多岐にわたります。皆さまが一つになってキャッシュレス化を進めていくようにするために、普段の業務を通じて国庫金の知見を培ってきた私たちは、関係者の方々をつなげる橋渡し役、いわばハブとしての役割を果たしたいと思って取り組んでいます」

金融機関の声に耳を傾け 課題を共有していく

金井さんの指揮のもと、多方面にわたる関係者が一体となってキャッシュレス化を推進していくために、金融機関との意見交換を進めてきたのは、同グループの今井潤さんです。

「国庫金の Pay^{ペイジー}easy による納付に対応している約四四〇の金融機関すべてにお声掛けし、お客さまに対するキャッシュレス納付の働き掛けの方法や工夫などに関するアンケート調査を、ここ数年で定期的を実施してきました。また、アンケートでは把握しきれない、より詳細な背景事情などについても、日本銀行支店のネットワークも活用して、個別の面談で意見交換を重ね、金融機関がどこに苦労されているかが見えてきました。

アンケートや個別面談を通じていただいたご意見を踏まえ、例えばキャッシュレス納付の拡大に向けた好事例などを共有することで、取り組みをさらに充実させたいと感じている金融機関の皆さまにも喜んでいただけた。

また、申告と納付の担い手が異なり、納付の電子化が進んでいない点について、キャッシュレス納付の利用拡大のためには、納付手続きの川上にあたる申告実務を担う税理士の皆さまのほか、申告や納付に

オンライン会議も活用して全国の金融機関へキャッシュレス納付の輪を広げる

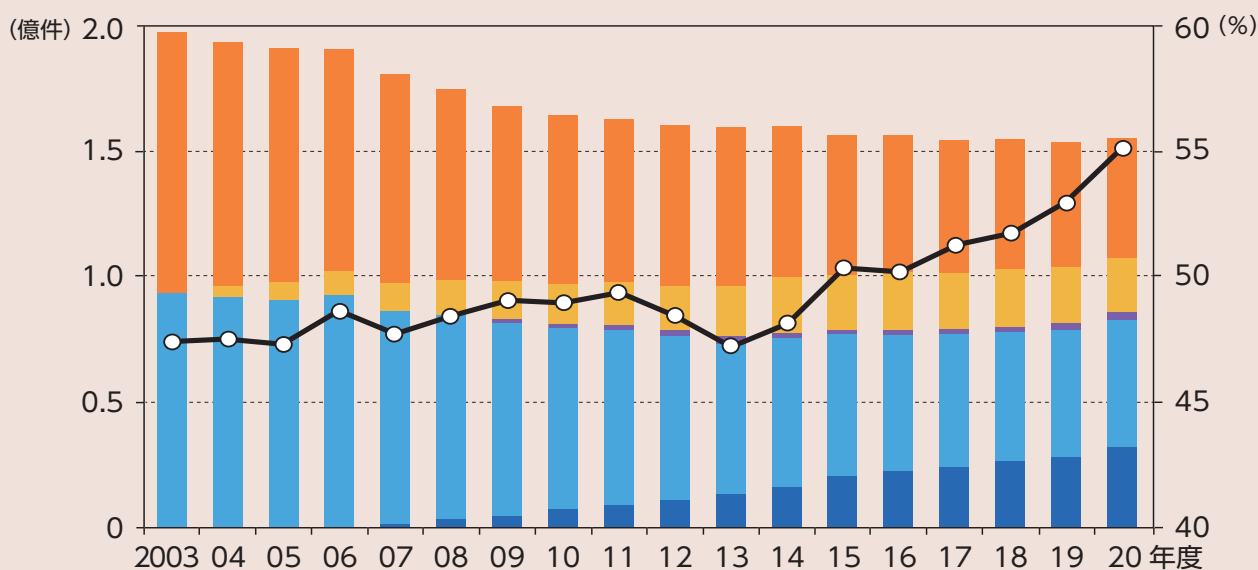


使われる税務システムを開発・提供するベンダー（システム製造元）の協力が不可欠だということも分かりました。キャッシュレス化を推進するにあたって、どこに働き掛ければよいか明確になったのは大きかったですね」

キャッシュレス化を目指し 多方面へアプローチ

今井さんの分析を活かして、日本銀行本支店と国税当局との連携を図り、話し合い

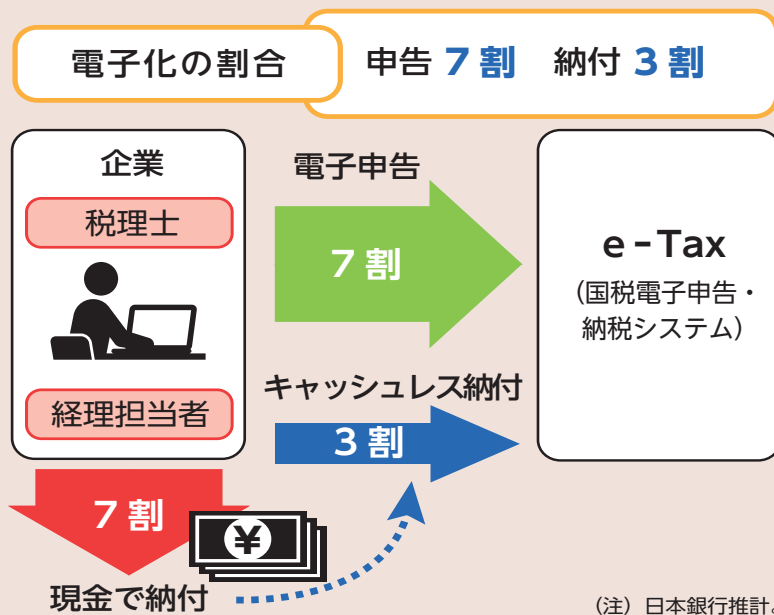
国庫金のキャッシュレス納付比率はようやく5割を超えたところ



■ 窓口納付件数 ■ コンビニ納付件数 ■ クレジットカード納付件数 ■ 口座振替納付件数 ■ 電子納付件数 ■ 現金納付
●— キャッシュレス納付比率 (右軸)

(注) 1. 日本銀行推計。
2. 口座振替納付の件数は、日並び要因による影響を過去に遡って補正。

申告と納付の電子化割合の乖離^{かいり}を埋めることが課題



を進めてきたのは同グループ企画役補佐の田中遼さんです。

「金融機関からいただいたご意見を国税当局とも共有させてもらうことで、関係者が同じ視点に立って、ともに次の一手を考えていただけるようになりました。これは、日本銀行がまさにハブとなって関係者をつなぐ役割を果たすことができた結果で、感

概深く思っています。

具体的には、金融機関の声を反映し、国税当局では納付に関するリーフレットに工夫を凝らしたり、キャッシュレス納付の手順に関する動画を制作したりと、これまでにない新しい取り組みにつながりました。また、日本銀行では、企業がキャッシュレス納付に切り替える際のキーパーソンとなる税理士の



キャッシュレス納付推進の輪を広げるため税理士の皆さまとも意見交換会や見学会を実施

皆さまに向けて、国庫金の書面納付書を処理する現場の見学会を開催するなど、いかに大量の書面処理が残っているかを実感し、キャッシュレス納付の意義に共感していただけるような機会を設けました」

また、今井さんは、税務システムのベンダーとの話を通じて得た手応えについて、胸を張ってこう語っています。

「企業が利用する税務システムにはキャッシュレス納付を簡単に行うことができる機能を備えるなど、さまざまな工夫を凝らしていただいていることを目の当たりにできたことから、こうした工夫を広く知ってもらうために企業に働き掛けたり、税務システムベンダーに対してはシステムの利便性をより一層高めていただくようお願いしています。こうした取り組みにより、キャッシュレス化への歩みを着実に進めることができているのではないのでしょうか」

未来を切り拓く共同推進宣言

さまざまな関係者との連携を模索しながら進めてきた試みが実を結んだのが、二〇二一年五月の「キャッシュレス納付共同推進宣言」でした。東京国税局の呼び掛けのもと、同局管内の一都三県（東京、千葉、神奈川、山梨）、税理士会、納付者団体、金融機関、税務システムのベンダーなど、日本銀行も含めて全一二六団体が参加



官民一体となってキャッシュレス納付を推進

しました。キャッシュレス納付推進に関する共同宣言が、国税局単位で行われたのは全国初であり、参加団体数は過去最大規模となりました。また、国税と地方税のキャッシュレス化を一体で推進する方針を打ち出したことも画期的でした。これまで関係者の皆さまとともに地道に準備を進めてきた田中さんは期待を込めてこう話します。「キャッシュレス納付の利便性や利用手

キャッシュレス納付共同推進宣言

千葉県・東京都・神奈川県・山梨県

キャッシュレス納付共同推進宣言

社会全体のデジタル化は、国民・企業の利便性を向上させ、行政の効率化に資するものであり、その推進は、官民問わず、私たちにとって共通の課題です。

こうした中、国税局、地方公共団体及び関係民間団体においては、申告・納付のデジタル化、すなわち電子申告・キャッシュレス納付の利便性向上や普及促進に向けて、様々な取組を進めてきました。また、金融機関においても、税公金の収納・支払の効率化に向けて、より便利な金融サービスを社会に提供してきました。

こうした取組のもと、電子申告については、相当程度利用が拡大してきた一方、キャッシュレス納付については、未だ普及の余地が大きい状況にあります。

デジタル化のメリットをより多くの方が得られるよう、私たちが一層連携し、協力して取り組んでいくことが重要であると認識しています。

私たちは、こうした共通認識のもと、「いつでも・どこでも・便利な」キャッシュレス納付の一層の普及に向けて、共同して推進していくことを宣言します。

令和3年5月24日

【共同宣言者】

東京税理士会	館山信用金庫	中南信用金庫	都留信用組合
東京地方税理士会	佐藤信用金庫	甲府信用金庫	中央労働金庫
千葉県税理士会	朝日信用金庫	山梨信用金庫	一般社団法人全国銀行協会
東京国税局管内税務村営組合	興産信用金庫	房総信用組合	一般社団法人全国地方銀行協会
一般社団法人東京市会連合会	さわやか信用金庫	跳子商工信用組合	一般社団法人信託協会
一般社団法人千葉県会連合会	東京シティ信用金庫	君津信用組合	一般社団法人第二地方銀行協会
一般社団法人山梨県会連合会	芝信用金庫	あまが信用組合	一般社団法人全国信用金庫協会
山梨県青色申告会連合会	東京東信信用金庫	全東管信用組合	一般社団法人関東信用金庫協会
一般社団法人東京法務士会連合会	東管信用金庫	東海信用組合	一般社団法人東京府信用金庫協会
一般社団法人神奈川法務士会連合会	駿有信用金庫	文化産業信用組合	信金中央金庫
一般社団法人千葉法務士会連合会	小松川信用金庫	東京証券信用組合	一般社団法人全国信用金庫協会
一般社団法人山梨法務士会連合会	足立成和信用金庫	東京厚生信用組合	千葉県信用組合協会
東京国税局間税会連合会	東京三協信用金庫	東信用組合	一般社団法人東京府信用金庫協会
株式会社みずほ銀行	西京信用金庫	江東信用組合	神奈川県信用組合協会
株式会社三菱UFJ銀行	西武信用金庫	青和信用組合	山梨県信用組合協会
株式会社三井住友銀行	城高信用金庫	中ノ郷信用組合	全国信用協同連合会
株式会社りそな銀行	昭和信用金庫	共立信用組合	一般社団法人全国労働金庫協会
株式会社千葉銀行	日黒信用金庫	七島信用組合	労働金庫連合会
株式会社千葉興業銀行	世田谷信用金庫	大東京信用組合	農林中央金庫
株式会社さくらびし銀行	東京信用金庫	第一勧業信用組合	株式会社ゆうちょ銀行
株式会社横浜銀行	城北信用金庫	警視庁職員信用組合	株式会社ゆうちょ銀行
株式会社山梨中央銀行	野洲川信用金庫	東京消防信用組合	株式会社ゆうちょ銀行
三菱UFJ信託銀行株式会社	展鴨信用金庫	東京都職員信用組合	地方税共同機構
みずほ信託銀行株式会社	青柳信用金庫	八丁信用組合	税務システム連絡協議会幹事会
三井住友信託銀行株式会社	多摩信用金庫	朝日新聞信用組合	
株式会社京葉銀行	横浜信用金庫	神奈川県医師信用組合	
株式会社東日本銀行	かむがわ信用金庫	神奈川県農林医師信用組合	日本銀行
株式会社東京スター銀行	湘南信用金庫	横浜労働信用組合	千葉銀行
株式会社神奈川銀行	川崎信用金庫	信用組合横浜華銀	東京銀行
千葉信用金庫	平塚信用金庫	小田原第一信用組合	神奈川県
純子信用金庫	きがみ信用金庫	相愛信用組合	山梨県
東京マイ信用金庫	中景信用金庫	山梨県民信用組合	山梨県

順のさらなる周知を、関係団体で協力して行っていく予定です。また現在、官民一体での取り組みは他の地域でも見られ始めており、今後こうした動きが全国に広がっていくことを期待しています」

国庫業務企画グループの皆さんは、多くの関係者と力を合わせながら、先人たちが作り上げてきた制度やシステム基盤を用いて、キャッシュレス納付のさらなる普及に向け、アンケートや面談を通じて、さまざまなご意見に耳を傾けてきました。そうした中で浮かび上がった課題に対応すべく、日頃からお付き合いのある官庁や金融機関との意見交換を重ねるとともに、税理士や税務システムのベンダーといった関係者とも新たに関係を築き、キャッシュレス納付の輪を広げながら、ともに歩みを進めてきています。

グループ長の西澤さんは、最後にこう語りました。

「今後も全国各地の関係者の皆さまと緊密に連携して取り組みを続けていきたいと思っています。『いつでも、どこでも、便利な』というキャッシュレス納付のメリットを、より多くの皆さまに体験していただきたいですね」

(肩書などは二〇二一年五月末時点の情報をもとに記載)



日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」(展望レポート)を決定し、公表しています。本稿では、2021年7月の展望レポート(基本的見解は7月16日、背景説明を含む全文は7月19日公表)のポイントを解説します。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/>

「経済・物価情勢の展望」(展望レポート)

二〇二一年七月

二〇二一～二〇三年度の 中心的な見通し(図表1、2)

【経済】

当面の経済活動の水準は、対面型サービス部門を中心に、新型コロナウイルス感染症の拡大前に比べて低めで推移するものの、ワクチン接種の進捗などに伴い感染症の影響が徐々に和らいでいくことで、外需の増加や緩やかな金融環境、政府の経済対策の効果にも支えられて、回復していくとみられる。その後、感染症の影響が収束していけば、所得から支出への前向きの循環メカニズムが強まるも、わが国経済はさらに成長を続けると予想される。

【物価】

消費者物価(除く生鮮食品)の

前年比は、目先、ゼロ%程度で推移すると予想される。その後、経済の改善が続くも、当面のエネルギー価格上昇の影響に加え、携帯電話通信料の引き下げの影響、携帯電話通信料の引き下げの影響、剥落などもあって、消費者物価(除く生鮮食品)の前年比は、徐々に上昇率を高めていくと考えられる。

経済・物価のリスク要因

【先行きの経済・物価見通しの不確実性】

こうした先行きの見通しについては、感染症の帰趨やそれが内外経済に与える影響によって変わりが得るため、不透明感が強い。また、上記の見通しでは、感染症の影響が収束するまでの間、企業や家計の中長期的な成長期待が大きく低

下せず、金融システムの安定性が維持されるもとで金融仲介機能が円滑に発揮されると考えているが、これらの点には大きな不確実性がある。

【リスクバランス】

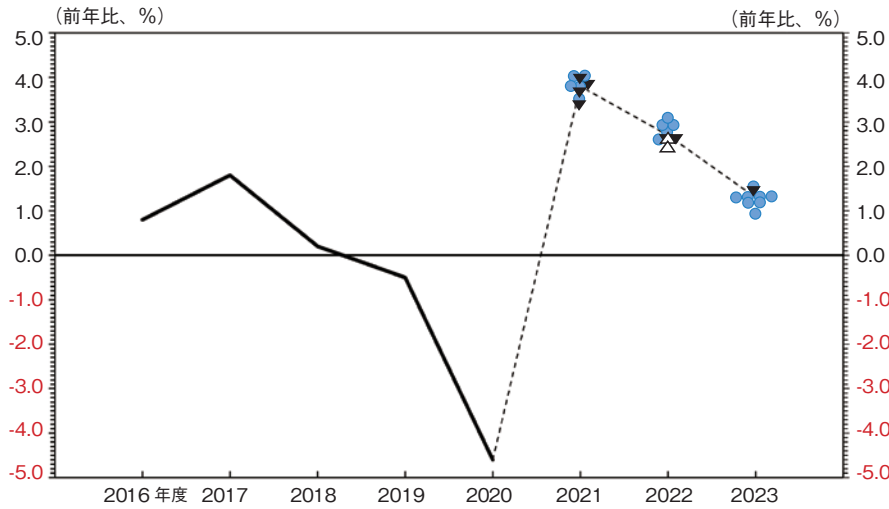
リスクバランスは、経済の見通しについては、感染症の影響を中心に、当面は下振れリスクの方が大きいが見通し期間の中盤以降は概ね上下にバランスしている。物価の見通しについては、下振れリスクの方が大きい。

金融政策運営

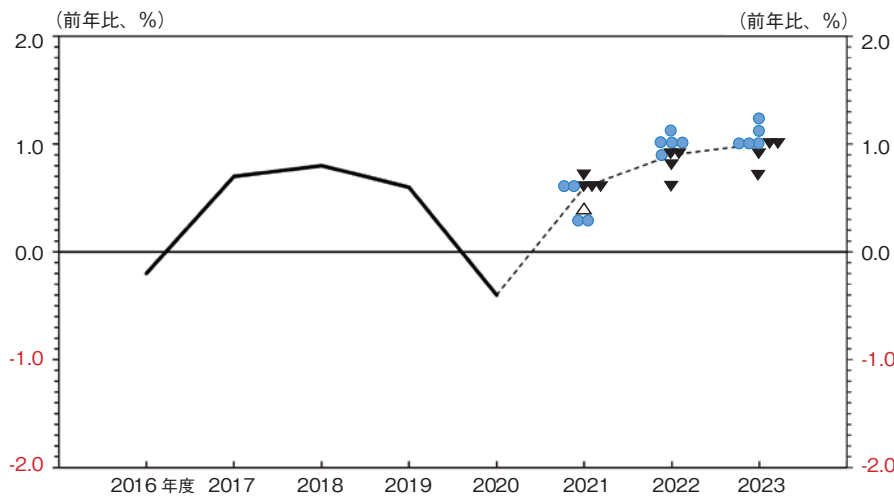
二%の「物価安定の目標」の実現を目指し、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「長短金利操作付き量的・質的金融緩

図表1 政策委員の経済・物価見通しとリスク評価

(1) 実質 GDP



(2) 消費者物価指数 (除く生鮮食品)



(注1) 実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。

(注2) ●、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すとともに、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。●は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。

和」を継続する。マネタリーベースについては、消費者物価指数(除く生鮮食品)の前年比上昇率の実績値が安定的に2%を超えるまで、拡大方針を継続する。引き続き、①新型コロナ対応資金繰り

支援特別プログラム、②国債買入れやドルオペなどによる円貨および外貨の上限を設けない潤沢な供給、③それぞれ約一二兆円および約一八〇〇億円の年間増加ペースの上限のもとでのETFおよびJ

REITの買入れにより、企業等の資金繰り支援と金融市場の安定維持に努めていく。当面、新型コロナウイルス感染症の影響を注視し、必要があれば、躊躇なく追加的な金融緩和措置を

図表2 政策委員の大勢見通し

(対前年度比、%)

	実質 GDP	消費者物価指数 (除く生鮮食品)
2021 年度	+3.5 ~ +4.0 <+3.8>	+0.3 ~ +0.6 <+0.6>
4 月時点の見通し	+3.6 ~ +4.4 <+4.0>	0.0 ~ +0.2 <+0.1>
2022 年度	+2.6 ~ +2.9 <+2.7>	+0.8 ~ +1.0 <+0.9>
4 月時点の見通し	+2.1 ~ +2.5 <+2.4>	+0.5 ~ +0.9 <+0.8>
2023 年度	+1.2 ~ +1.4 <+1.3>	+0.9 ~ +1.1 <+1.0>
4 月時点の見通し	+1.2 ~ +1.5 <+1.3>	+0.7 ~ +1.0 <+1.0>

(注1) <>内は政策委員見通しの中央値。「大勢見通し」は、各政策委員が最も蓋然性の高いと考える見通しの数値について、最大値と最小値を1個ずつ除いて、幅で示したものであり、その幅は、予測誤差などを踏まえた見通しの上限・下限を意味しない。

(注2) 今回の消費者物価の見通しは、現行の2015年基準をベースにしているが、本年8月に2020年基準への切り替えが予定されている。その際には、前年比上昇率が下方改定される可能性が高い。

講じる。政策金利については、現在の長短金利の水準、または、それを下回る水準で推移することを想定している。



日本銀行のレポートから

「地域経済報告」（さくらレポート）は、日本銀行本支店等が、日頃、企業ヒアリング等を通じて行っている各地域の経済金融情勢に関する調査の結果を、年4回（1月、4月、7月、10月）の支店長会議の機会毎に取りまとめたものです。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。https://www.boj.or.jp/research/brp/rer/index.htm/

「地域経済報告」（さくらレポート）

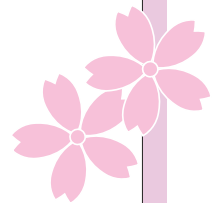
各地域の 景気判断の概要

— 二〇二一年七月 —

各地域の景気の総括判断をみると、「持ち直しのペースが鈍化している」とする地域があるなど感染症の影響から引き続き厳しい状態にあるが、多くの地域では「基調としては持ち直している」または「持ち直しつつある」などとしている。

	【21/4月判断】	前回との比較	【21/7月判断】
北海道	新型コロナウイルス感染症の影響から引き続き厳しい状態にあり、横ばい圏内の動きとなっている	➡	新型コロナウイルス感染症の影響から引き続き厳しい状態にあり、横ばい圏内の動きとなっている
東北	基調としては持ち直しているが、足もとはサービス消費を中心に新型コロナウイルス感染症再拡大の影響が強まっているとみられる	➡	サービス消費を中心に引き続き厳しい状態にあるが、基調としては持ち直している
北陸	厳しい状態にあるが、持ち直しつつある	➡	一部に下押し圧力が続いているが、総じてみると持ち直している
関東甲信越	サービス消費を中心に引き続き厳しい状態にあるが、基調としては持ち直している	➡	サービス消費を中心に引き続き厳しい状態にあるが、基調としては持ち直している
東海	厳しい状態が続く中でも、持ち直している	➡	厳しい状態が続く中でも、持ち直している
近畿	新型コロナウイルス感染症の影響により、依然として厳しい状態にあるが、全体として持ち直している。もともと、まん延防止等重点措置が実施されるもとの、サービス消費への下押し圧力は強い状態にある	➡	新型コロナウイルス感染症の影響により、サービス消費などへの下押し圧力は一部残るものの、全体として持ち直している
中国	新型コロナウイルス感染症の影響から、依然として厳しい状態にあるが、持ち直しの動きが続いている	➡	持ち直しのペースが鈍化している
四国	新型コロナウイルス感染症の影響から一部に弱い動きもみられるが、全体としては持ち直しの動きが続いている	➡	新型コロナウイルス感染症の影響から、持ち直しのペースが鈍化している
九州・沖縄	厳しい状態にあるものの、輸出・生産を中心に持ち直しつつある	➡	厳しい状態にあるものの、輸出・生産を中心に持ち直しつつある

（注）前回との比較の「➡」、「➡」は、前回判断に比較して景気の改善度合いまたは悪化度合いが変化したことを示す（例えば、改善度合いの強まりまたは悪化度合いの弱まりは、「➡」）。なお、前回に比較し景気の改善・悪化度合いが変化しなかった場合は、「➡」となる。





「打初め式」での記念撮影（左から2人目が若田部副総裁）（撮影：中島美沙）

新五百円貨の「打初め式」が 開催されました

▼二〇〇〇年以来、二二年ぶりの改鑄となる新五百円貨の製造を始める「打初め式」(注1)が、二〇二一年六月二十一日、さいたま市の造幣局さいたま支局で開かれました。

▼「打初め式」には、日本銀行から若田部昌澄副総裁が出席し、麻生太郎財務大臣らとともに圧印機のスイッチを押すとともに、次々と新五百円貨が打ち出されました。

新 500 円貨



▼新五百円貨は、偽造抵抗力強化の観点から、①三種類の金属を組み合わせた「バイカラー」。

クラッド(二色三層構造) (注2)、②「異形斜めギザ」(注3)を導入するほか、③貨幣の縁の内側に新たに微細文字を加工するなどしています。

▼新五百円貨については、財務省より、本年十一月をめどに発行を開始することが発表されています。日本銀行では、新五百円貨の安定的かつ着実な流通に向けた準備作業を進めています。なお、具体的な発行開始日については、所要の準備が整い次第、日本銀行から公表します。

▼「打初め式」や改鑄に関する情報は、日本銀行ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。



(注3) 貨幣の縁に入れた斜めギザの一部を他のギザとは異なる形状にしたもので、通常貨幣(大量生産型貨幣)への採用は世界初。

「金融モニタリング協議会」の開催について

▼日本銀行では、より質の高いモニタリングの実施と、金融機関の負担軽減を図る観点から、金融庁との連携をさらに強化す



Financial Monitoring Council

「金融モニタリング協議会」のロゴマーク

るための取り組みを進めています。本年三月には、金融庁とともに、金融モニタリングでの連携強化やデータの一元化などについて、これまでの取り組み状況や今後の方針を整理し、「金融庁・日本銀行の更なる連携強化に向けた取り組み」を公表しました。

▼こうした取り組みの一環として、六月七日、「金融モニタリング協議会」(Financial Monitoring Council)の第一回会合を開催しました。本協議会は、昨年十一月に設置した「金融庁検査・日本銀行考査の連携強化に向けたタスクフォース」を後継する幹部級の常設会合として、今後も、半年に一回程度の頻度で開催していく予定です。日本銀行では、本協議会を通じて、金融庁との連携強化の取り組みをさらに推進していく方針です。

**貨幣博物館テーマ展
「渋沢栄一にまつわる
お金の話 ―第一国立銀行
紙幣発行までのあゆみ―」
開催中!**

二〇二三年一月十六日(日)まで

▼二〇二四年度上期をめどに、新しい日本銀行券が発行されます。そのうち一万円券は四〇年ぶりに肖像が変わり渋沢栄一となります。渋沢栄一は一橋家、大蔵省に仕官し、そして第一国立銀行の頭取を長く務め、それぞれでお金の発行に携わりました。本展示では、渋沢栄一が発行に関わった幕末から第一国立銀行までのそれぞれの紙幣と、第一国立銀行の風景が描かれた錦絵をご紹介します。

東京駅や日本橋にお出かけの際にお立ち寄りいただければ幸いです。

【入館料】 無料

【休館日】 月曜日（ただし祝日）

日は開館)、年末年始(十二月二十九日～一月四日)

【開館時間】 午前九時三十分～午後四時三十分(入館は午後四時まで)

※最新の情報は貨幣博物館ホームページをご覧ください。

【所在地】 東京都中央区日本橋本石町一―三―一



渋沢栄一が頭取を務めた第一国立銀行（錦絵は期間中展示替えがあります）



右/渋沢栄一が発行に携わった一橋家の紙幣
下/渋沢栄一の名前が書かれた第一国立銀行紙幣



【お問い合わせ先】

金融研究所貨幣博物館

〇三―三二七七一

三〇三七

「決済の未来フォーラム
クロスボーダー送金分科会
(第三回)」を開催(六月)

▼決済機構局では、六月三日に標記会合を完全オンライン会合の形式で開催しました。

▼会合では、これまでの分科会と同様、①クロスボーダー送金の改善に向けた国際的な取り組みや、②AML/CFE対策(注)について活発な議論が交わされたほか、③個々の送金事業者によるクロスボーダー送金関連の取り組みが紹介されました。

▼①では、金融安定理事会(FSB)の市中協議文書「クロスボーダー送金の四つの課題の対処に向けた目標」で示された定量的な目標案が説明されました。参加者からは、改善に向け

たグローバルな取り組みを支持する声が聞かれました。そのうえで、グローバルな定量目標の在り方については、定義や達成への道筋をしっかりと示す必要性を強調する声や、達成目標時期を適切に設定する必要があるといった声が聞かれました。

▼②では、AML/CFE対策について関連業務の効率化に向けた取り組みなどが紹介されました。効率化に向けて協業などの取り組みがなじむ業務分野や、AIなどの技術の活用可能性などが議論されました。

▼③では、外国人技能実習生などが郷里送金をするための金融サービスの提供について、銀行とノンバンクの協業事例が紹介されたほか、サービス改善に向けた送金事務のデジタル化や海外事業者との協業などの取り組みが紹介されました。また、クロスボーダー送金サービスの提供とその改善について、非競争

領域における送金事業者間の協働に期待するとの見方が示されました。

▼本会合の議事要旨などは、日本銀行ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。



(注) マネーロンダリングおよびテロ資金供与対策などを指す。

「決済の未来フォーラム
デジタル通貨分科会」
中央銀行デジタル通貨を
支える技術」を開催

▼決済機構局では、六月十一日に、標記会合を完全オンライン会合の形式で開催し、一般事業者の方々から、中央銀行デジタル通貨(CBDC)に活用し得る具体的な技術や取り組みをご紹介いただきました。

▼会合では、CBDCがデジタル社会における決済プラットフォームとして機能することを念頭に、求められる①セキュリティ

ティについて、主な検討ポイントや認証技術の考え方、②ユニバーサルアクセスについて、モバイルネットワークの進化や近年の金融アプリの特徴、③情報技術の標準化について、決済システムレポート別冊「デジタル通貨に関する情報技術の標準化」に関する説明と、意見交換が行われました。

▼日本銀行としては、民間部門、とりわけ一般事業者が有する最新の技術やノウハウについて学習し、今後の実証実験や制度設計に活かしていくことが大切と考えています。決済機構局としては、こうした活動を通じて、CBDCの検討に関する連携の輪が広がっていくことを期待しています。

▼本フォーラムの議事概要などは、日本銀行ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。



編集後記

■インタビュー相手の白石氏は、ヨットマンをサムライに例えています。波しぶきを船上で浴びながら荒海を帆走する写真（6頁）を見るとヨットレースの過酷さがヒシヒシと伝わり、確かにサムライだと得心できます。記事を通じて、白石氏の熱気と元気、そしてヨットの魅力が読者に伝わればと願っています。

■日本史の教科書では遠流の地として取り上げられる隠岐島ですが、島の海士町が「地方創生のトップランナー」であることを、地域の底力では紹介できました。多様なバックグラウンドを持つ島外からの移住者が、地域振興、研修、漁業やさまざまな分野で活躍できる環境を海士町が用意できている点は、他の自治体のみならず、あらゆる組織にとって示唆的だと思われます。

■手前味噌で恐縮ですが、FOCUS BOJで紹介した国庫金のキャッシュレス納付に向けた日本銀行業務局の取り組みは、官庁、金融機関、税理士、企業などの幅広い関係者への働き掛けを平易に解説できたと自負しています。読者の皆さまのご評価はいかがでしょうか？

（渡邊）

[アンケート募集中]

「にちぎん」に関するご意見・ご感想は、アンケートよりお寄せください。

日本銀行のホームページからご回答いただけます。

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

(https://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ (<https://www.boj.or.jp/>) をご覧ください。

にちぎん 2021年秋号
編集・発行人 渡邊昌一
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-1609



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 文唱堂印刷株式会社
禁無断転載

「ISOパネル（第三回）… 金融の デジタル化時代における 新しいガバナンスと 標準化」を開催（六月）

▼決済機構局では、六月二十三日に標記パネルディスカッションをオンラインで開催しました。

▼社会全体のデジタル化の進展により、取引のボーダーレス化が一層進めば、多くの利害関係

者が互いに関与し合う新しいガバナンスの姿に向かっているのを見方が近年示されています。また、関係者のボーダーレスな合意に基づいて策定された国際標準を活用していく可能性も高まるとみられています。

▼パネルディスカッションでは、「Society5.0」（注）と呼ばれる社会に向けた新たなガバナンス像や、分散型金融が登場

している金融サービス分野でのガバナンスの課題などとともに、標準化の果たす役割について経済産業省、金融庁の担当官および弁護士の方々が議論を行いました。

▼決済機構局では、金融サービス分野の国際標準化を検討する国際標準化機構（ISO）・金融サービス専門委員会（TC68）の国内委員会事務局を務め

ています。金融サービス分野の標準化に関心のある方は、日本銀行ホームページに活動内容や取り組みを掲載しておりますので、ご覧ください。

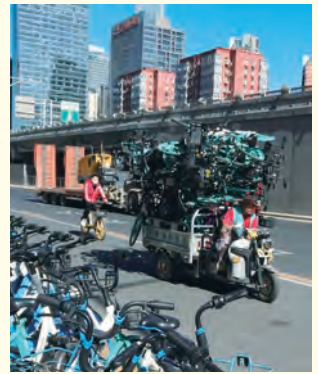
（注）政府の第五期科学技術基本計画で提唱された「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」。





from Beijing

歴史と近未来が交錯する巨大都市



シェア自転車を手で運ばれる様子

中国の首都・北京は、古い歴史を持ち、元の時代にはすでに首都として栄え、故宮や万里の長城など7つの世界文化遺産があるほか、胡同と呼ばれる昔ながらの古い町並みが各所に残るなど、少し散歩するだけで歴史を感じさせてくれます。

その一方、中国国内で屈指のビジネス先進地でもあります。もともと北京はスタートアップ企業が多いと言われていますが、最近の調査で、都市別のユニコーン企業数（注）で世界一になったと報告されました。特に、電子商取引、人工知能、シェアリングエコノミーなどの企業が数多く存在すると言われています。有名な大学も多く、デジタル分野に秀でた人材が多く集まってくるのが背景にあるでしょう。市内でもイノベーションが起こっていく様子や、それがビジネスにつながっていく様子を垣間見ることができます。北京の中心地から車で30分ほどの場所

では、公道で自動運転の実験が行われており、一般の人でも試乗ができます。また、ロボットが、アパート内のフロントから部屋まで宅配物を届け、レストランでは料理をテーブルまで運ぶ姿を見ることができます。

このように、人手を介さないサービスが模索されているものの、現在のユニコーン企業の先進的なビジネスが、多くの人手によって成り立っていることも有名です。北京では、ネット通販で購入した日用品が1時間以内に届きますが、それを可能としているのは多くの配達員です。本年5月公表の人口統計では、北京の常住人口が10年前と比べて228万人増えた2,189万人となり、これ以外にも多くの人が地方から働きにきています。

身近に雄大な歴史を感じられるのが北京の魅力ですが、先進的なビジネスの街で多くの人々が生き生きと暮らす様子を感じられるのも大きな魅力の一つでしょう。
(日本銀行北京事務所)

(注) ユニコーン企業：創業10年以内で、企業価値の評価額が10億ドルを超え、株式を上場していないベンチャー企業。

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



胡同の町並み。休日に住民が道端でよくトランプをしています



自動運転の車。歩行者が横断しても手前で停止します



にちぎん